

二〇一五年一月一六日

ごまめ囁む真面目一途の不退転
どんどの火暴れ人垣崩れけれ
ほぐされてまた舌をだすどんど屑
奉獻酒かけてどんどの火を入るる
天を突くメタセコイヤの枯木かな

二〇一五年一月一五日

見下ろせば冬日に沈む京盆地
羊羹を分厚く切つて女正月
初句会なればと豪華レストラン
小豆粥無事退院を寿ぎて
見晴るかす北山は今時雨らし
頬染めて歌もとびだす女正月

二〇一五年一月一四日

息白く厄除けうどん啜りけり
初絵馬にハングル文字も見られけり
平穩を謝して鐘打つ寒九かな
鏡餅全体重をのせて切る
谷崎の自筆てふ碑に風花す
冬帝が弦引き絞る斜張橋

二〇一五年一月一三日

初風や白き小舟の海に映ゆ
宮裏の梅の万蕾弾けさう

宏 虎

なつき

なつき

さつき

さつき

せいじ

うつき

あさこ

かず

せいじ

つくし

せいじ

よし女

三 刀

なつき

せいじ

菜 々

明日香

はく子

寒釣の黙に終始す一と日かな

雅 流

藁苞に差し込む日あり寒牡丹

ひかり

ゆき届く娘の介護あたたかし

か ず

厨窓あまねき日ざし春隣

明日香

恙無き余生に感謝小豆粥

宏 虎

あひたがひ存問かはし初稽古

満 天

二〇一五年一月一二日

肩越しに賽銭が飛ぶ初恵比須
新成人見上ぐる母の慈眼かな

明日香
ひかり

二〇一五年一月一一日

神木をけぶらす宮のどんどこかな
東雲の空も焦げよとどんど燃ゆ
青竹の筧を縷々と寒の水
駅伝にエールを送る炬燵かな
粕汁に頬を染めゐる好好爺
福笹を担ぎミナミの人波に

さつき

さつき

うつき

満 天

ともえ

雅 流

二〇一五年一月一〇日

朝市の客が囲める焚火かな
山伏も振り袖もゐる初電車
残照の湖水にあまた鴨の陣
遮断機のなかなか開かず北吹けり

うつき

こすもす

せいじ

よし女

毎日句会みのる選・二〇一五年一月一八日